

令和8年度オープンキャンパスを開催

半導体プロトタイピングラボ開所式を開催

こども本の森 札幌・北大が開館—北大の知を子どもたちへひらく新たな拠点が始動—



全学ニュース

- 1 現代日本学プログラム課程「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催
- 2 新渡戸カレッジと増毛町の連携による「グローバル実践科目Ⅱ」を実施
- 3 未来の北大キャンパスをデザインする—新渡戸カレッジ「グローバル発展科目Ⅱ」で学生が提案するサステイナブルな将来像—
- 4 Hokkaidoサマー・インスティテュート2026 国際交流イベントを開催
- 5 札幌キャンパスを駆け抜ける—北海道マラソン2026—
- 6 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 8 令和8年度オープンキャンパスを開催
- 10 化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD）と List プラットフォームが第4回シンポジウムを開催
- 11 免疫ふしぎ未来2026に出展
- 12 アイヌ文化振興モニュメント「ヤイコタンフナラ」の設置
- 13 「第19回 資生堂 女性研究者サイエンスグラント」本学教員3名が受賞
- 14 ハゲタカ著者による講演会・鼎談を開催
- 15 半導体プロトタイピングラボ開所式を開催
- 16 2026年度キャリア支援・就職担当教職員情報交換会を開催
- 17 映画『新渡戸の夢～学ぶことは生きる証～』上映会とティーチインを開催

部局ニュース

- 18 こども本の森 札幌・北大が開館—北大の知を子どもたちへひらく新たな拠点が始動—
- 19 令和8年度理学院優秀研究奨励賞授賞式を举行
- 20 令和8年度分島亮研究奨励金授与式を举行
- 21 北海道医療AIビジネスプランコンテスト2026を開催
- 22 医学研究院医理工学グローバルセンターが第13回GCB国際シンポジウムを開催
- 23 医学研究院医理工学グローバルセンターが第13回GCB医学物理サマースクール及び第9回GCB分子生物医科学・診断学サマースクールを開催



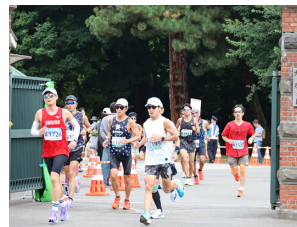
アイヌ文化振興モニュメント「ヤイコタンフナラ」の設置



農学部・農学院とシンガポール国立大学間で「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」を開催



Hokkaidoサマー・インスティテュート2026 国際交流イベントを開催



札幌キャンパスを駆け抜ける—北海道マラソン2026—

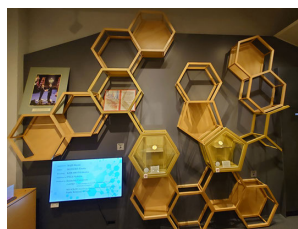
- 24 「がん研究に係る北大・UoMワークショップ」を開催
- 25 薬学研究院で「第23回薬学研究院研究発表会」を開催
- 26 薬学部で「第27回生涯教育特別講座夏季講演会」を開催
- 27 農学研究院で150周年記念講演会を開催
- 28 農学部・農学院とシンガポール国立大学間で「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」を開催
- 29 第47回あぐり大学「世界に一つだけの地図をつくってみよう」を開催
- 30 函館キャンパスの学生・教職員が函館港まつりに参加—創基150周年をPR—
- 31 函館市電（市営交通）に創基150周年記念広告を掲出
- 32 令和8年度水産学部公開講座「海をまるごとサイエンス!」が終了
- 33 総合博物館でノーベル賞展示室をリニューアルオープン
- 34 附属図書館で創基150周年記念「北海道大学附属図書館の歴史」展を開催中
- 35 連続トークイベント「知のトビラをたたく」@北大図書館 第1回「水の中に棲むホネのない生き物たちのトビラ」を開催
- 36 こども本の森×北海道大学 学びのプログラム「今日からきみも考古学者!」を開催
- 37 北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション 北管理部が「森林（もり）の市」に出展
- 38 北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション 北管理部が「北大研究林サイエンスツアー」を開催

理事退任にあたって 39

表敬訪問 40

人事 41

- 41 新任教授紹介



総合博物館でノーベル賞展示室をリニューアルオープン



こども本の森 札幌・北大が開館—北大の知を子どもたちへひらく新たな拠点が始動—

表紙：半導体プロトタイピングラボ開所式を開催（関連記事15頁に記載）

裏表紙：キャンパス懐古⑧ ポプラ並木を背景に立ち並ぶ農家の「藁ぼっち」（1980年代）

■全学ニュース

現代日本学プログラム課程 「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催

現代日本学プログラム課程（以下「現プロ」という。）では、令和8年度1学期に、対面による「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催しました。

本シリーズは、学内外の日本研究の専門家を招き、現代日本学の最先端について英語で学ぶことを目的とし、主

に現プロ学生を対象として開催しています。クリーン・スザンネ教授（教育イノベーション機構教育推進研究部）がコーディネーターとなり、日本研究をテーマとして、多彩な講師による講演を9回にわたり実施しました。学内から延べ人数50名以上が出席し、現代日本学の諸相を学びました。

現プロでは今年度2学期以降も、現プロ学生のみならず、学内外からの参加者の現代日本学への学びをさらに深め実学の涵養を目指し、より一層魅力的なゲストレクチャー及びワークショップを実施する予定です。

（学務部教育推進課）

講演内容及び登壇者（一部抜粋）

- ・ 5月14日（木） 「Reimagining Rural Futures: in-migration and entrepreneurship in contemporary Japan and beyond」
シモーナ・ゾレット助教（広島大学）
- ・ 6月11日（木） 「A Global Crossroad in Rural Japan: Our Lady of Akita's Global Presence and Local Obscurity」
大森久子准教授（秋田国際大学）
- ・ 6月19日（金） 「My Friends/Informants Over Five Decades」
ゴードン・マシューズ名誉教授（香港中国大学）
- ・ 6月25日（木） 「A Cosmopolitical Countryside: One Health, Wellbeing and Ikigai on the Frontiers of Japan」
ポール・ハンセン教授（秋田大学）
- ・ 7月10日（金） 「Island Tourism in Japan: Beyond Sun, Sand and Sea」
フンク・カロリン学術研究員（広島大学）
- ・ 7月30日（木） 「From Lens to Life: Visual Storytelling and Migration in Japan, Singapore, and Germany」
メイガ・ワダワ助教（上智大学）



ゾレット助教（広島大学）



ハンセン教授（秋田大学）

新渡戸カレッジと増毛町の連携による「グローバル実践科目Ⅱ」を実施

新渡戸カレッジ大学院カリキュラムでは、北海道大学創基150周年記念事業の一環として、グローバル実践科目Ⅱ（チーム学習の実践）を増毛町と連携のもとで実施しました。

本科目は、実社会の課題に取り組むプロジェクト型科目であり、今学期は「人口減少が進む小規模自治体の活性化」をテーマに展開しました。学期の前半には、新渡戸カレッジの修了生であり、現在は増毛町地域おこし協力隊の川手紅梨子氏が授業に参加し、町の歴史や産業、人口減少と高齢化の現状について講義を行いました。

学生たちは「地域づくり会社の起業

家」という設定のもと、観光、食・特産品、交通・移動、教育、医療・福祉、テクノロジー、国際交流・多文化共生の7分野において、収益性を備えた事業提案を検討しました。6月29日（月）に行った現地調査では町内各所を訪問し、事業者や住民の皆様との対話を重ねました。

7月28日（火）・30日（木）には、最終発表会「From Campus to Coast（キャンパスから海辺の町へ）」を開催し、大学院生73名が17チームに分かれ、英語で事業提案を発表しました。各チームは、現地調査で得た証言をもとに、空き部屋を活用した滞在型観

光、高齢者の移動を支える相乗りの仕組み、酒造及び水産の副産物を家畜飼料へ転換する事業など、具体的な提案を行いました。

増毛町からは「現在の取り組みと重なる点が多く、実務上も非常に参考になる」との高い評価をいただいたほか、提案の現地試行に向けた再訪の呼びかけもありました。今後は提案の実装に向けた協議を進めるとともに、次学期以降も連携を継続し、大学と地域が長期にわたり協働する体制の構築を目指します。

（学務部教育推進課）



学生による発表の様子



増毛町の職員による講評の様子



川手氏による増毛町紹介の様子



増毛町で実施した現地調査の様子（6月29日）

未来の北大キャンパスをデザインする—新渡戸カレッジ「グローバル発展科目Ⅱ」で学生が提案するサステイナブルな将来像—

北海道大学創基150周年記念事業の一環として、新渡戸カレッジオナーズプログラム大学院カリキュラムの「グローバル発展科目Ⅱ（課題発見の基礎と実践）」の最終発表会が、公開形式で実施されました。

本プロジェクトでは、サステナビリティ推進機構の高野大地特任准教授より課題提供を受け、「サステナブルなキャンパスの将来像」をテーマに議論を展開しました。現在、本学ではキャンパスマスタープランの策定が進められており、「どのようなキャンパスを目指すべきか」という重要な問いが検討されています。履修生である大学院生はこのテーマに対し、因果層分

析などの専門的な分析手法を用いながら、8週間をかけてキャンパス内でのフィールドワーク、アンケート調査、インタビューを重ね、多角的な視点から現状を分析しました。

8月5日（水）にはフロンティア応用科学研究棟にて、最終ポスター発表会"The Future Forum"が開催され、大学院生14名が4チームに分かれて英語で調査結果と未来のシナリオを発表しました。各チームは、留学生への大学理念の浸透、研究室単位での資源アクセスの最適化、分野を越えた交流拠点のあり方、来訪者から見たキャンパスの開放性と持続可能性など、多角的な視点から未来の北大キャンパスの姿を描き

出しました。当日は、サステナビリティ推進機構をはじめ、学内各部局から多くの教職員が参加し、ポスターの前で活発な質疑応答が行われました。

課題テーマの設定にあたった高野特任准教授からは、キャンパスマネジメントの専門家の視点に立ち、難度の高いテーマに正面から向き合い、学内で聞き取った生の声を根拠として具体的な提案にまとめた点について高い評価が示されました。本学期の成果を踏まえ、次学期はより深い分析と検証を目指して、取り組みを継続していく予定です。

（学務部教育推進課）



ポスター発表の様子



高野特任准教授による講評の様子

Hokkaidoサマー・インスティテュート2026 国際交流イベントを開催

7月から8月にかけて、Hokkaidoサマー・インスティテュートの参加者と本学学生を対象に、二つの国際交流イベントを開催しました。

7月30日（木）には、北海道大学植物園及び北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）を巡るイベントを開催し、Hokkaidoサマー・インスティテュートの参加者と本学学生、計24名が参加しました。植物園では、北海道に自生する植物を観察したほか、本学が所蔵する貴重な展示資料を見学し、北海道の自然や文化への理解を深めました。続いて訪れた北海道庁旧本庁舎では、館内の展示を通して現在の北海道の成り

立ちにも触れました。参加者は各所で写真撮影を楽しみながら交流を深めていました。

8月5日（水）には、旧永山武四郎邸及び旧三菱鉱業寮で交流会を開催しました。本イベントは、季節の和菓子と抹茶を楽しみながら、参加者同士が気軽に交流できる場を設けることを目的として企画したものです。当日は学部生4名を含む計21名が参加し、自己紹介を終える頃には打ち解け、旧永山武四郎邸の和室は終始賑やかな笑い声に包まれていました。解散前にはサッポロファクトリーの札幌開拓使麦酒醸造所の見学館を訪れ、ビール造りの歴史

にも触れました。

いずれのイベントにおいても、終了時には参加者同士で連絡先を交換するなど、解散後も名残を惜しむように交流を続ける姿が見受けられました。

Hokkaidoサマー・インスティテュートでは、今後も、参加者と本学学生が授業内外で交流を深められるよう、交流の場づくりに取り組んでまいります。

Hokkaidoサマー・インスティテュートの活動は、Instagramで随時公開しています。

https://www.instagram.com/hokkaido_si/

（学務部国際交流課）



北大植物園集合写真



旧永山武四郎邸及び旧三菱鉱業寮集合写真

札幌キャンパスを駆け抜けるー北海道マラソン2026ー

8月30日（日）、北海道マラソン2026が開催され、最高気温が23℃と8月下旬としては過ごしやすい天候の中、国内外から集まった数多くのランナーが本学札幌キャンパスを駆け抜けました（フルマラソンエントリー人数：21,474人）。

ランナーはレース終盤の38km付近

から本学キャンパスに入り、緑あふれるメインストリートを縦断し、クラーク像を右手に見ながら、中央ローンの木陰を通り、南門（札幌農学校時代の正門）を抜けて、フィニッシュの大通公園へ向けてラストスパートをかけました。

2009年大会からコースに加えられた

本学キャンパスには、多くの市民が応援に駆けつけ、その温かい声援がランナーたちを後押ししました。

なお、本マラソンの様子は、UHB（北海道文化放送）とBSフジで生中継されました。

（社会共創部広報課）



総合博物館前の給水所



キャンパスを駆け抜けるランナー



（左から）男子優勝の湯浅 仁選手、2位の丹所 健選手、3位の荒生実慧選手



女子優勝の新谷仁美選手

北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130周年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をするとしています。

2026年8月に北海道大学は創基150周年を迎えました。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計	（7月31日現在）／61,932件	11,606,782,560円
うち、北海道大学創基150周年記念募金累計	（7月31日現在）／24,884件	5,442,014,003円

<ご寄附状況>

7月は348件67,930,859円のご寄附を賜りました。そのご厚志に対しまして、心より感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます（五十音別・敬称略）。

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社エイト設計、エーワイハッピー株式会社、北日本フード株式会社、株式会社キメラ、一般財団法人協済会、一般社団法人旭都財団、株式会社香貴、国土防災技術株式会社、サンメディカル株式会社、GEヘルスケア・ジャパン株式会社、合同会社ショコラックス、医療法人スワンアイクリニック、医療法人社団武田隼会ただ皮膚科スキンケアクリニック、株式会社タナカ、チカワデンタル、株式会社電材重機、株式会社東亜エンジニアリング、とおる歯科、株式会社トップワンテック、中銀インテグレーション株式会社、ナカバヤシ株式会社札幌営業所、西企画、株式会社日星電気、株式会社ニッポン、日本クリエート株式会社、日本製鋼所室蘭製作所北大会、日本中央競馬会、表示灯株式会社札幌支社、北大保健同窓会、北海道バリュースコープ株式会社、医療法人湧光会アスヒカル歯科

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青井 良平	青木 俊介	審 一範	浅沼 佳南	阿部 雅史	栗国 浩之	栗国美佐子
石井 哲夫	石井 充	石子 智康	石塚真由美	石野 悟司	和泉 唯信	板倉 賢一	井手 彩集
井出 肇	伊藤 雄三	井戸川寛志	井上 生一	井上 将希	今井 四郎	今井 晋	入澤 秀次
梅田 英喜	梅本 由佳	絵面 良男	縁記 和也	猿渡 晴久	遠藤 公憲	遠藤 卓郎	太田 信廣
太田 広三	大原 正範	小方 功	岡田 英子	沖崎 遼	小田原一史	小野 善康	小原 大和
片山 琢	金川 聖也	金川 眞行	金曾 裕一	河谷真知子	河本 充司	北田さやか	衣川 暢子
金家 茂幸	久々湊 聖	工藤 智巳	Christina Ahmadian	栗原 誠治	黒柳 俊雄	上月 浩	小関 成樹
児玉久美子	後藤 普	小長井奎幸	小丹枝利昭	小林 賢人	小南 拓哉	近藤 順一	齊藤 晋
齋藤 久	坂本 大介	崎元 大志	佐々木貴信	佐藤壮一郎	佐藤 時則	三升畑元基	志済 聡子
志津木 健	新木亜梨沙	菅原 新也	鈴木 貴之	曾村 尚明	高瀬登志彦	高橋 憲司	高橋美千子
高橋 理子	田栗 和奈	武士 俊也	武谷 敬之	田中 純	田中 祐未	千田奈津子	對馬 新
都野建二郎	土居 功	東上 清	中川 和果	中野 功司	永峰 文洋	中村 啓子	中村 文信
中村 祐希	西井 優美	西田 和代	根本 叔治	長谷川隆広	服部 恭典	花田 秀一	原 啓介
原田 祐司	東 秀明	樋口 宏子	廣重 勝彦	福永 悟郎	藤井 治也	藤澤 裕子	藤田 芳康
淵上 玲子	干野季美子	本田 浩之	牧田 道夫	松井 耕二	松浦 勇匡	松下 泰之	松田 英雄
松原 謙一	三木 證永	水上 卓哉	宮崎 周平	宮田 信幸	宮前 賢次	六浦 宣子	村上 重美
村上 広輝	村瀬徳啓充	森田 真也	保井 章子	山下 景子	山下 信博	山下 裕久	山田 哲
山根 由樹	山本 浩史	山本 裕之	余湖 兼右	横山 考	横山 皓三	吉井 透	吉田 香織
吉田桂世子	吉田 広志	吉田 光敏	若杉 佳子				

<寄附者への特典>

創基150周年記念銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1,000万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年度9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）。

<感謝状の贈呈>



サンワード証券株式会社様（令和8年7月7日）



パナソニックホールディングス株式会社様（令和8年7月7日）



分島敦子様（令和8年7月23日）



長沼昭夫様（令和8年7月29日）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff/>

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（給与口座からの引落）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室 基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室 基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室 基金事務担当までご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室 基金事務担当にもご用意していますので、お越しただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済・PayPayでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室 基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

令和8年度オープンキャンパスを開催

8月1日（土）～3日（月）の3日間、札幌・函館キャンパスにおいて「オープンキャンパス2026」を開催しました。

本年度は、中学生から申込可能な「自由申込プログラム」を2日（日）に、「高校生限定プログラム」を3日（月）に実施しました。

当日は延べ17,804名が緑豊かなキャンパスに集い、学部等企画の学部・学科紹介や模擬講義、ゼミ・研究室体験など多彩なプログラムに参加しました。参加者からは印象に残ったことと

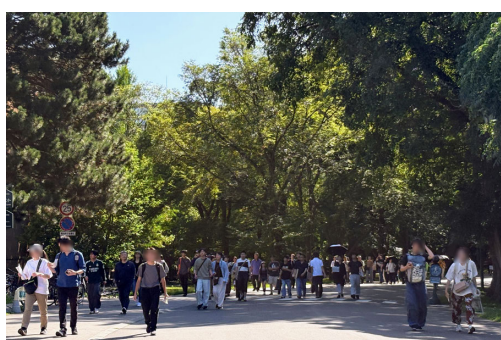
して「先生の熱意がとても伝わり、こちらも学問に対して興味が出てきました」「高校生にも理解しやすい講演で、新しいことを学ぶ機会を楽しめました」「本格的な内容の講義を受けることができて、大学での授業がより楽しみになりました」といった感想が寄せられるなど、新たな学びに出合うとともに、進学意欲を高める機会となりました。

また、保護者の方も多く訪れており、アドミッション本部による講演

（大学説明）への参加や、総合博物館・大学文書館などの見学を通じて、本学の教育環境をはじめ研究成果や歴史に触れていただきました。

アドミッション本部では、今後もオープンキャンパスが参加者にとってより良いイベントになるよう引き続き検討してまいります。

（アドミッション本部）



夏空に緑が映える札幌キャンパス



メインストリートの様子



アドミッション本部企画
講演「北海道大学で学ぶということ」



総合教育棟で行われた水産学部の模擬講義

令和8年度オープンキャンパス 参加者数

学部等名	自由申込 プログラム		高校生限定 プログラム		部局等別 合計	
	令和8年度	令和7年度	令和8年度	令和7年度	令和8年度	令和7年度
文学部	503	623	119	62	622	685
教育学部	217	214	69	74	286	288
法学部	441	431	93	92	534	523
経済学部	376	385	243	231	619	616
理学部	1,410	1,355	71	101	1,481	1,456
医学部医学科	352	349	96	94	448	443
医学部保健学科	332	365	317	355	649	720
歯学部	114	129	131	123	245	252
薬学部	444	508	411	501	855	1,009
工学部	1,294	1,250	324	337	1,618	1,587
農学部	247	233	133	139	380	372
獣医学部	351	324	29	38	380	362
水産学部	321	329	202	187	523	516
大学院環境科学院	403	355			403	355
北大キャンパスビジットプロジェクト	81	83	68	16	149	99
サステナビリティ推進機構	37	19	43	47	80	66
教育イノベーション機構 CoSTEP			10	11	10	11
附属図書館	76	59			76	59
大学文書館	201	133			201	133
総合博物館	7,647	6,976			7,647	6,976
国際交流課	41	40			41	40
各種個別相談会・説明会 講演・説明会*	557	499			557	499
合 計	15,445	14,659	2,359	2,408	17,804	17,067

*各種個別相談会・説明会の内訳

入試相談会（アドミッション本部）、経済支援相談会（奨学金、授業料減免等）（奨学・キャリア支援課）、新渡戸カレッジ相談会（教育推進課）
初年次教育・学部移行相談会（教育推進課）、就職相談会（奨学・キャリア支援課）、障害学生支援相談会（アクセシビリティ支援室）
学生寮説明会（学生支援課）

*講演・説明会の内容

講演「北海道大学で学ぶということ」（アドミッション本部）、新渡戸カレッジ説明会（教育推進課）

「参加者数」について（令和8年度） ※大学文書館、総合博物館、アドミッション本部（講演）＆新渡戸カレッジ（説明会）を除く

オープンキャンパス申込システムから「参加者リスト」をダウンロードし、項目毎に集計。

参加者リストには、当日受付時にスマホで「受講証」をスワイプした者のみ反映されるため、

「受講証」画面のスクリーンショットや紙媒体を提示した者等は参加者数に含まれていない。

化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD）と Listプラットフォームが第4回シンポジウムを開催

総合イノベーション創発機構化学反応創成研究拠点（WPI-ICReDD、以下「ICReDD」という。）は8月4日（火）にICReDD棟にてListサステナブルDX触媒連携研究プラットフォーム（以下「Listプラットフォーム」という。）との共催で第4回Listプラットフォームシンポジウムを開催しました。

Listプラットフォームは、ICReDDのベンジャミン・リスト特任教授／ユニバーシティプロフェッサーを中心とし、令和5年4月より始動した共同研究プロジェクトです。計算科学やロボット・機械学習・人工知能などのDX技術との融合により、環境負荷やSDGsに配慮した次世代有機触媒（サステナブルDX触媒）の開発を飛躍的に進展させるとともに、その関連分野を連携研究として拡張・加速させることで、次世代有機触媒開発における世界的研究拠点としての地位確立を目指します。

当日は、Listプラットフォームが取り組む研究の分野で活躍する国内外の研究者5名による講演が行われました。新規触媒の設計開発や有機合成手法における最新の研究成果報告から長年の研究経験に基づく既存手法への洞察に富んだ提言に至るまで、多岐にわたった講演内容にはいずれも参加者からの活発な質問が続き、時間いっぱいまで途切れることなく議論が交わされました。また、ポスターセッションで

は28名の若手研究者が発表に臨み、会場は参加者の熱気に包まれ大きな賑わいを見せていました。

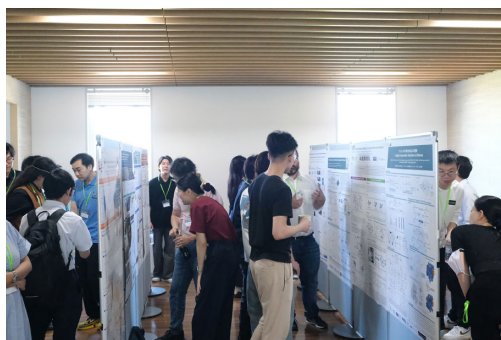
113名が参加したシンポジウムは、リスト特任教授の講演をもって盛会のうちに全プログラムを終えました。

ICReDD及びListプラットフォームでは今後もこのようなシンポジウムや講演会などの開催を通じて、拠点における研究を世界へ発信するとともに、様々な分野の研究者との融合研究を展開し、次世代を見据えた世界的研究拠点としての地位確立を目指していきます。

（総合イノベーション創発機構化学反応創成研究拠点）

Listプラットフォーム 第4回シンポジウム

講演者（講演順）：浦口大輔教授（触媒科学研究所）、納戸直木特任助教（名古屋大学）、ギャビン・チット・ツイ准教授（香港中文大学）、林雄二郎教授（東北大学）、ベンジャミン・リスト特任教授（ICReDD/マックス・プランク石炭研究所）
座長：辻 信弥特任准教授（ICReDD）



ポスターセッションの様子



講演するリスト特任教授



講演者と参画教員

免疫ふしぎ未来2026に出展

総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点は、7月26日（日）、東京都の日本科学未来館で開催された「免疫ふしぎ未来2026」に昨年に引き続き出展しました。

本イベントは、日本免疫学会が主催し、文部科学省が後援する、「見て楽しむ! ふれて楽しむ!! 免疫学!!!」をキャッチフレーズとした子どもから大人まで幅広い世代が免疫の仕組みや最新研究を楽しく学べる体験型の科学イベントです。難しく感じられがちな「免疫」を身近で興味深いテーマとして紹介し、科学や健康への関心を高めることを目的として開催され、当日は約1,300名が来場しました。

本拠点は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）先進的研究開発戦略センター（SCARDA）が推進する「ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業及び感染症危機対応医薬品等の研究開発プラットフォーム事業」におけるアウト

リーチ活動の一環として、昨年に続き2回目の参加となります。同事業に参画する五つの拠点機関（北海道大学、東京大学、千葉大学、大阪大学、長崎大学）がそれぞれブースを構え、クイズを出題したり、模型などを使いながら、免疫についてわかりやすく解説しました。

本拠点のブースでは、「病気をみつける、病気からまもる、病気をなおす」をテーマに、感染症予防やワクチン、免疫の働きについて楽しく学べるパネル、クイズ形式の展示やコロナウイルスを模したキャラクター「コロナくん」との記念撮影を行い、手洗いやワクチン接種など、感染症から身を守るために大切なことを分かりやすく紹介しました。終日、多くの家族連れがブースに訪れ、クイズラリーや研究者との対話を楽しみました。

また、同会場では、遺伝子病制御研究所の高岡晃教教授が主宰する幼児向け寸劇「免疫戦隊まもるんジャー」

ショーも開催され、研究者がT細胞やB細胞、マクロファージ、ウイルスなどになりきって免疫の仕組みを紹介し、本ショーの最後に発表する合言葉「めんえき」を本拠点のブースで伝えたい来場者には、オリジナルの「研究員シール」をプレゼントしました。ショーとブース展示が連動することで、子どもたちが楽しみながら会場内を巡り、免疫やワクチンへの理解を深めることができました。

本イベントは、ワクチンの理解や免疫学への関心を高めるとともに、本拠点の研究活動を広く知っていただく有意義な機会となりました。今後も本拠点では、ワクチンや感染症研究の重要性を広く発信し、次世代への科学啓発と社会との交流に積極的に取り組んでまいります。

（総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点）



ワクチン研究開発拠点ブースとコロナウイルスを模したマスクをかぶったスタッフ



来場者にクイズを出題



幼児向け「免疫戦隊まもるんジャー」ショーと合言葉を伝えたらもらえる「研究員シール」



アイヌ文化振興モニュメント「ヤイコタンフナラ」の設置

北海道大学のあるこの土地は、先住民族であるアイヌが長きにわたり、暮らしと生業を営んできた場所です。

アイヌ共生推進本部（アイヌ シサム ウレシパ ウコピリカレ ウシ）では、今回、日高地方・平取町二風谷の工芸家である貝澤 徹氏に、アイヌ文化振興モニュメントを制作いただき、8月19日（水）に本学附属図書館（本館）玄関ホールへ設置しました。モニュメントには、本学の雨龍研究林から切り出されたセンノキを使用しており、アイヌ語で「集落」を意味する「コタン」の守り神であるシマフクロウが鮭を携え、今まさに力強く羽ばたこうとする姿が彫り上げられています。その足元

には、この土地にあったコタンの暮らしと、豊かな恵みをもたらしたサクシュコトニ川の風景が彫り込まれています。

作品のタイトルは、アイヌ語では「ヤイコタンフナラ」、日本語では「自らの故地を探る」、英語では"Seeking One's Place"です。このタイトルには、二つの意味が込められています。一つは、アイヌルーツの構成員もその他の構成員も、自分と今日キャンパスが建つこの土地とのつながりを見つめ直すこと、もう一つは、これから私たちがどのようなキャンパスや社会を築いていくのか、その未来を考えることです。

本学は、「ヤイコタンフナラ」が、

ここを訪れる一人ひとりに、自らの故地とは何か、自分はどのような社会を次の世代へ引き継いでいきたいのかを静かに問いかけ続ける存在となり、さらにそうした場所を見守る存在となることを期待しています。

また、「ヤイコタンフナラ」の附属図書館への設置にあたり、8月20日（木）に貝澤氏、北海道アイヌ協会常務理事の結城幸司氏をお招きし、設置記念式典を実施しました。

詳細は北大公式ウェブサイトのお知らせをご覧ください。

<https://www.hokudai.ac.jp/news/2026/08/post-2421.html>

（アイヌ共生推進本部）



アイヌ文化振興モニュメント
「ヤイコタンフナラ」



式典の様子

「第19回 資生堂 女性研究者サイエンスグラント」 本学教員3名が受賞

「第19回 資生堂 女性研究者サイエンスグラント」において、本学から歯学研究院口腔機能補綴学教室の平田恵理助教、工学研究院応用化学部門の岩井 愛助教、遺伝子病制御研究所幹細胞生物学分野の孫 ユリ講師の3名が受賞しました。

本賞は、自然科学分野の幅広い研究テーマを対象に、将来指導的立場を目

指す女性研究者の研究活動とキャリアを支援することを目的として、株式会社資生堂が実施している研究助成制度です。第19回は137名の応募者から10名が選出され、受賞者の研究活動やキャリア形成が支援されます。

7月24日（金）には授賞式が開催され、受賞者に受賞楯が授与されました。

この度の受賞は、先生方の日頃の研

究活動の成果が高く評価されたもので、今後の研究活動のさらなる発展と活躍が期待されます。

先生方の受賞コメントは、ダイバーシティ・インクルージョン推進本部ウェブサイトに掲載しています。

<https://www.dei.hokudai.ac.jp/archives/29298/>

（ダイバーシティ・インクルージョン推進本部）

受賞研究テーマ

平田恵理助教	「透明ナノファイバーを用いた次世代骨再生用膜の開発」
岩井 愛助教	「ゲル・半固体電解液を用いた環境調和型アノード酸化技術の創出」
孫 ユリ講師	「閉経周辺期における脂肪組織局所エストロゲンの機能変容」



平田助教



岩井助教



孫講師

ハゲタカ著者による講演会・鼎談を開催

半導体フロンティア教育研究機構（以下「IFERS」という。）は、7月16日（木）に小説「ハゲタカ」シリーズで知られる小説家の真山 仁氏をお招きし、「ハゲタカ著者が見る世界の未来、日本の展望 ～半導体に希望はあるか～」を開催しました。このイベントは、理学部大講堂を会場としてオンラインも含めたハイブリッド形式にて行われました。

真山氏は2月にハゲタカシリーズ第6弾『チップス ハゲタカ6』を刊行し、微細な半導体製造で世界的な技術を誇る台湾企業をめぐり、米国、中国、そして半導体産業の復活を目指す日本の思惑が交錯する物語を執筆した小説家として知られています。

初めに真山氏による講演が行われ、半導体に関心を持つきっかけとなったのは、工学研究院の太田泰彦特任教授の著書『2030 半導体の地政学—戦略物資を支配するのは誰か』を読み、日本がすでに世界の先端競争で中心的な

存在ではないという現実を突きつけられたことであると語りました。

真山氏は、半導体の必要性や依存する社会について疑問を投げかけ、「その技術で、どんな社会をつくりたいのか」を問う必要があると訴えました。ミクロな世界で見るのではなく、道具である半導体と使う人間、それをまとめる社会を俯瞰的に見ることができる「プロデューサー」が重要であり、半導体の未来に必要なことは何か、大学でプロデューサーを生み出すためにはどうすればいいのか考えてほしいと来場者に語りました。

講演後、真山氏、太田特任教授に加え、IFERSの石森浩一郎機構長の3名による鼎談が行われました。鼎談では、北大が目指す半導体人材の育成や、大学と政府や企業との距離感について議論が交わされました。また、Rapidus株式会社の挑戦をめぐり、「情熱」と「冷静な分析」をどう両立するかも論点になり、真山氏は、すでに激しい競

争が続く市場で追いつくことだけを目指すのではなく、既存の前提を疑い、別のルールや新しい領域をつくることが重要であると語りました。

こうした議論を受け、研究の在り方や国の支援、インフラとしての半導体の認識など幅広い視点で会場の学生から質問が寄せられ、質疑応答は予定時間内に収まりきらないほど活発に行われました。閉会にあたり、網塚 浩理事・副学長から挨拶があり、「未来を正確に予測することは難しくても、変化に対応し、自ら未来をつくる柔軟な人材を育てることは大学の変わらない使命だ」と述べました。

本イベントは今までの半導体関連のイベントとは異なり、「小説家」という文系の視点も交えた内容となり、これまでとは違う角度から半導体を捉える貴重な機会となりました。

（半導体フロンティア教育研究機構）



工学研究院太田特任教授の著書『2030 半導体の地政学』について話す真山氏



鼎談の様子



学生からの質問を受ける様子

半導体プロトタイピングラボ開所式を開催

半導体フロンティア教育研究機構（以下「IFERS」という。）は、7月29日（水）に、「実践的なプロセス実習による教育」と「次世代半導体の研究開発」をリードする新たな拠点となる「半導体プロトタイピングラボ」の開所式を創成科学研究棟で行いました。式典には、内閣府、文部科学省、北海道経済産業局、北海道、札幌市、千歳市などの関係者のほか、報道機関など約60名が出席しました。

半導体プロトタイピングラボは、半導体デバイス試作の主要な工程の実習が可能な設備を揃えており、道内の大学や高等専門学校も利用可能な施設として整備されたものです。

開所式では、初めに児玉大輔内閣府地方創生推進事務局参事官から来賓挨拶

をいただいた後、IFERSの石森浩一郎機構長と松尾保孝半導体プロトタイピングラボ室長から概要の説明がありました。続いて、寶金清博総長、鈴木直道北海道知事、秋元克広札幌市長、横田隆一千歳市長からコメントがあり、寶金総長は、「プロトタイピングラボとは、イノベーションやアイデアを試す挑戦を最初に行う場所という意味と、試作品を作る場所、そしてトレーニングする場所という、三つの意味があると思っています」と述べ、「北海道大学、ひいては北海道の総合力を活かしたい。半導体は職人的な技術領域も含めて考えると『総合芸術』。理系だけではなく文系も含めた総力を挙げて『Second Ambitious Challenge』を進めなければ成功はない。このラボ

を活用して、頭も体も手も動かせる半導体人材を育てていきたい」と展望を語りました。

その後、関係者によるテープカットが行われた後、クリーンルーム内の視察が行われました。

半導体プロトタイピングラボの詳細については、IFERSのウェブサイト動画・リーフレットを公開していますので、こちらも併せてご覧ください。

<https://www.semicon.hokudai.ac.jp/news/2757/>



（半導体フロンティア教育研究機構事業支援室）



開所式でコメントする寶金総長



テープカットを行う（左から）横田千歳市長、秋元札幌市長、寶金総長、鈴木知事、児玉内閣府地方創生推進事務局参事官



半導体プロトタイピングラボを視察する関係者

2026年度キャリア支援・就職担当教職員情報交換会を開催

7月6日（月）、教育イノベーション機構キャリアデザインセンター主催で、各部局のキャリア支援・就職担当教職員との情報交換会を開催しました。

「学部から博士まで一貫したキャリア教育の強化」に向け、学内の各組織が連携し、学生の進路・就職支援に関する課題へ協働して取り組む体制を強化するため、キャリア支援・就職担当に携わる教職員とセンターの教職員が直接意見や情報を交換する場として、2023年度から年1回実施しています。昨年まで、キャリアセンターと先端人材育成センターが連携して開催していましたが、本年4月に両センターが統合され、教育イノベーション機構キャリアデザインセンターとなってから初

めの開催となりました。

意見交換や情報交換に十分な時間を確保するため、現在の就職環境やセンターの支援内容などを解説した動画を事前に配信し、参加者にあらかじめ視聴いただきました。

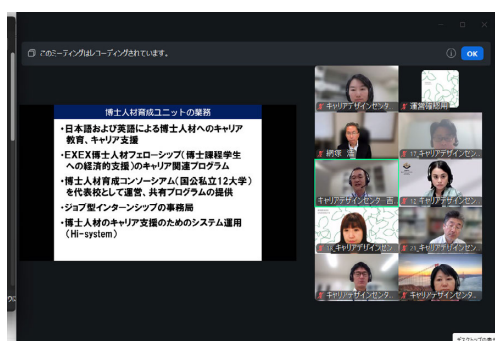
当日は、教育イノベーション機構長の網塚 浩理事・副学長からの挨拶の後、キャリアデザインセンターの業務内容について、亀野 淳キャリア教育開発ユニット長、川上あき学部・修士就職支援ユニット長、吉原拓也博士人材育成ユニット長・キャリアデザインセンター長から、それぞれのユニットの取り組みを説明しました。引き続き行われた参加者と各ユニット教職員との情報交換の場では、片垣麻里子特任

助教の進行のもと、各ユニットが行う支援内容について、特に留学生の就職活動や後付け推薦に対する対応の課題、学内組織との連携の可能性などについて意見交換が行われました。

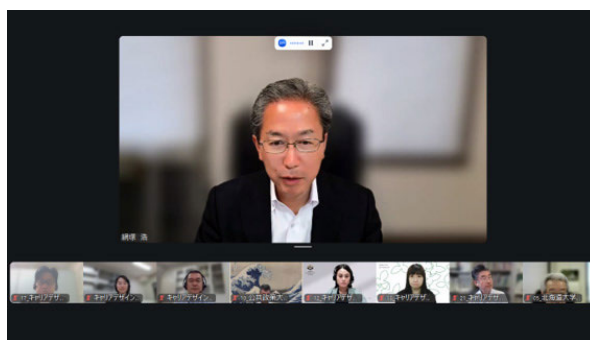
終了後のアンケートでは、学生の就職活動の最新状況を共有できた、他部署やセンターの支援内容が分かったなど、各部局の教職員間のネットワーク形成につながったとの意見が多く寄せられました。

今後も学生のキャリア支援のための情報を発信していきますので、ご協力をお願いいたします。

（教育イノベーション機構）



キャリアデザインセンターの各ユニット長からの業務説明



網塚理事・副学長からの挨拶

映画『新渡戸の夢～学ぶことは生きる証～』上映会とティーチインを開催

教育イノベーション機構教育開発センターリカレント教育ユニットは、新渡戸の夢映画製作委員会の共催と社会共創部広報課の協力の下で、7月26日（日）、学術交流会館にて、映画「『新渡戸の夢～学ぶことは生きる証～』」上映会とティーチイン～北海道大学の遠友夜学校の伝統から学びに開かれた社会を構想する～を開催しました。北海道新聞、毎日新聞、HBC北海道放送から取材があり、映画に対する期待と関心の高さがうかがえました。当日は194名が来場しました。

令和6年に制作された映画『新渡戸の夢～学ぶことは生きる証～』は「遠友夜学校」の理念と、その理念の現代への継承をテーマにしたドキュメンタリー映画です。映画は、遠友夜学校の卒業生がその子どもに語った、遠友夜学校の思い出についてのインタビューで構成されています。平成2年には遠友夜学校の精神を引き継いだ「札幌遠

友塾自主夜間中学」が開校しました。平成17年には北海道大学のボランティアサークルとして市民講座「平成遠友夜学校」が開講しました。主に北海道大学の「遠友学舎」を会場に、誰でも無料で参加できる平成遠友夜学校は、新渡戸稲造の遠友夜学校の理念を現代に受け継ぐ活動の一つです。

本上映会には、当映画のゼネラルプロデューサーで水産学部出身の並木秀夫氏、映画に出演した工藤慶一氏（北海道に夜間中学をつくる会共同代表）、平成遠友夜学校創設者の藤田正一氏（北海道大学名誉教授）が来場しました。工藤氏と藤田氏は、川本思心リカレント教育ユニット長（理学研究院准教授）と共に、映画上映後に「すべての人に学ぶ権利がある社会と大学の役割」をテーマに鼎談を行いました。司会進行は種村 剛教育推進研究部特任教授が務めました。

工藤氏は、北海道は義務教育未修了

者が全国一であり、その背景には第二次世界大戦後の貧困や混乱が影響していること、そして誰もが学び続ける社会が実現するための「平和」の必要性を指摘しました。藤田氏は岩手県盛岡出身の新渡戸稲造と札幌の関係について、新渡戸稲造が「私の精神的誕生地は札幌である」と語ったことを紹介しました。川本ユニット長は、「すべての人に学ぶ権利がある社会」の実現に向け、これまで行われてきた活動をつなげる役割を大学が果たすことの重要性について示しました。質疑応答では、来場者からの質問に対して工藤氏から、遠友夜学校ではアイヌの人々や朝鮮半島出身の人々をはじめ、多様な背景を持つ人々が生徒として学んでいたことが紹介されました。

（教育イノベーション機構）

新渡戸稲造
(にとべいなぞう)
写真提供：盛岡市先人記念館

新渡戸稲造が明治時代に始めた「遠友夜学校」
今もその地で脈々と受け継がれている。

学ぶことは生きる証

東京都推奨映画

新渡戸の夢

北海道大学の遠友夜学校の伝統から
学びに開かれた社会を構想する

上映作品『新渡戸の夢～学ぶことは生きる証～』は、札幌農学校第2期生の教育者、新渡戸稲造が妻メリーと共に1894年に創設した「遠友夜学校」をテーマにした作品です。
上映会終了後、工藤慶一さんと藤田正一さんをお招きし、誰もが学ぶ権利がある社会の実現と、そのための大学の役割をテーマにしたディスカッションを行います。

日時：2026年 7月 26日（日）
会場：北海道大学 学術交流会館 講堂
(〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目)
正門より歩いて左側の緑地・JR札幌駅北口より徒歩10分

参加費：無料／定員300名
開場：12:30
開会：13:00 閉会予定：15:40

主催：北海道大学教育イノベーション機構リカレント教育ユニット
共催：新渡戸の夢映画製作委員会
協力：北海道大学社会共創部広報課
後援：札幌市教育委員会・北海道教育委員会

創基150周年記念事業
ドキュメンタリー映画
にとべ

事前申込（先着順）
<https://forms.gle/9UDVbLRhUgHYyHy96>
申込期限：7月24日（金）正午
※定員に達し次第、締め切らせていただきます

150th
北海道大学創設150周年記念事業



映画出演者紹介の様子



鼎談の様子（左から）工藤氏、藤田氏、川本ユニット長、種村特任教授

『新渡戸の夢』上映会のフライヤー

■ 部局ニュース

こども本の森 札幌・北大が開館 —北大の知を子どもたちへひらく新たな拠点が始動—

8月1日（土）、世界的建築家である安藤忠雄氏が設計・寄贈した図書施設「こども本の森 札幌・北大」が北海道大学構内に開館し、オープニングセレモニーが開催されました。セレモニーには寶金清博総長、秋元克広札幌市長、名誉館長を務める漫画家・文筆家のヤマザキマリ氏ら約30名が出席しました。会場では、小中学生が安藤氏への感謝のメッセージを読み上げるとともに、安藤忠雄建築研究所の若山泰伸氏へ寄せ書きを贈呈し、開館を祝いました。

寶金総長は、「子どもたちが研究者や学生と直接触れ合い、ともに学べる

貴重な場所となった。50年、100年と続く事業にしたい」と期待を述べました。秋元市長は、「キャンパス全体が図書館であり、この施設を知の拠点として子どもたちの想像力を育んでほしい」と語りました。また、ヤマザキ名誉館長は、絵本と学術書を並べる特色ある蔵書構成に触れながら、「知性が発芽する礎となる場所」と開館を喜びました。

セレモニー後には、札幌市教育委員会中央図書館と附属図書館との主催による開館記念トークイベントが、オープンイノベーションハブ「エンレイソウ」にて開催され、25組の親子連れが

参加しました。前半ではヤマザキ名誉館長が、幼少期を過ごした北海道で本が心の支えとなった経験や、その体験が名誉館長就任を引き受けるきっかけになったことを紹介しました。また、来館する子どもたちに薦めたい6冊の本について語りました。後半では、総合博物館の小林快次教授との対談が行われ、好きなことを仕事に結び付けるまでの歩みや、こども本の森 札幌・北大への期待について意見を交わし、参加者は熱心に耳を傾けました。

（附属図書館）



オープニングセレモニーでのテープカット



開館記念トークイベントの様子

令和8年度理学院優秀研究奨励賞授賞式を挙行政

理学院では、7月24日（金）に理学部本館において、令和8年度理学院優秀研究奨励賞授賞式を挙行政しました。

この賞は、理学に関する優れた研究を推進する学生を表彰し、研究の更なるステージアップを支援することを目的に、博士後期課程1年生及び2年生を対象として平成30年4月に設けられま

した。

今年度は、創造性に富む卓越した研究計画を立案し、これに取り組んでいる19名が受賞者に選ばれました。

授賞式では、久保英夫理学院院长から、この賞の趣旨説明とお祝いの言葉が述べられた後、表彰状が一人ひとりに手渡されました。今後も、この賞が

本学院学生の基礎科学に関する深い洞察力と創造性、研究立案・推進能力の向上を一層喚起するものとなることを期待しています。

（理学院）



授賞式での記念撮影



久保理学院院长からの祝辞

令和8年度分島亮研究奨励金授与式を挙行

8月20日（木）、理学研究院長室において、「令和8年度分島亮研究奨励金授与式」が執り行われました。

本奨励金は、分島 哲様・分島敦子様が、令和3年5月にご逝去されたご子息分島 亮先生（元北海道大学大学院

理学研究院准教授）の意志を引き継ぎ、基礎研究を行う若手研究者の支援を願ってご寄附され、理学研究院において創設されたものです。

授与式では、関係者列席のもと、永井隆哉理学研究院長から採択者3名に

証状が授与され、本奨励金の趣旨や、永井研究院長と分島先生とのエピソード、今後の研究活動への期待と激励の言葉が述べられました。

（理学研究院）



採択者との記念撮影（左から永井研究院長、ユ・ドンウン博士研究員、ダグワドルジ・イチンホルロー研究員、宇津城遥平学術研究員、菅原育哉理学・生命科学事務部長）

北海道医療AIビジネスプランコンテスト2026を開催

8月9日（日）、医学部にて、北海道大学病院医療AI研究開発センター、ヘルスケアAIXイノベーションセンター（共同プロジェクト拠点）をはじめとする学内外の組織が主催し、「北海道医療AIビジネスプランコンテスト2026」を開催しました。

本コンテストは、医療AI分野における革新的なビジネスアイデアを発表し、社会実装や起業につなげることを目的に昨年から始まり、今回が2回目の開催となりました。

今年度は昨年度を上回る多数の応募があり、本学及び他大学の学部学生・大学院生並びに医療AI開発者養成プログラム（CLAP）受講者の一次審査を通過した参加者が、医療や介護・福祉の現場の課題を踏まえたハイレベルなアイデアを発表しました。

審査員には昨年に続き、ベンチャーキャピタル、産業界、大学関係者が参加しました。技術的実現性や社会的意義、ビジネスモデルなど多角的な観

点から評価が行われ、昨年までのBio Engineering Capital賞、パラマウントベッド賞、エア・ウォーター賞に加え、今回から新設されたCHCP賞を含む4賞が選出されました。

受賞者には今後、医療AI研究開発センター主催の特別セミナーにおいて、ビジネスプランの詳細を発表いただく予定です。

また、コンテスト終了後には、参加者と協賛企業がビジネスマッチングについて意見交換を行う場を設け、参加者同士での交流も行われました。

北海道における医療AIのさらなる広

がりと発展を目指し、今後もコンテストを定期的で開催する予定です。

なお、主催者であるヘルスケアAIXイノベーションセンターでは、情報系教員による最新のAI技術を医療系教員が医療に応用しながら、AIによる改革（AIX）の推進に取り組んでいます。今後も様々な活動を通じて、研究成果やアイデアの社会実装をさらに推進し、北海道から世界へと発信される医療AIイノベーションの芽を育ててまいります。

（医学研究院）



Bio Engineering Capital賞



参加者集合写真

主催	北海道大学病院 医療AI研究開発センター ヘルスケアAIXイノベーションセンター（共同プロジェクト拠点） 産学・地域協働推進機構 スタートアップ創出本部 北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク
共催	Bio Engineering Capital株式会社
協賛	PARAMOUNT BED Healthcare Fund エア・ウォーター北海道株式会社 フュージョン株式会社 株式会社地域ヘルスケア連携基盤（CHCP） The Medical AI Times株式会社 AI Dock デロイトトーマツグループ 株式会社北海道銀行 15thRock株式会社
受賞	・ Bio Engineering Capital賞 竹本竜太郎氏（北海道大学大学院歯学研究院） 「大学発・歯科矯正AI基盤 ― 蓄積症例と臨床知見を活かす症例検討支援プラットフォーム」 ・ パラマウントベッド賞 齊藤慈円氏（北海道大学大学院医学院 心臓血管外科教室 博士課程3年） 「KIZAMONI（兆しモニタリング）」 ・ エア・ウォーター賞 石田陽子氏（ai-X株式会社 北海道大学医学部医学科卒業） 「aiBOND スリープヘルス維持増進および睡眠障害科受診行動変容支援事業」 ・ CHCP賞 石田陽子氏（ai-X株式会社 北海道大学医学部医学科卒業） 「aiBOND スリープヘルス維持増進および睡眠障害科受診行動変容支援事業」

医学研究院医理工学グローバルセンターが第13回GCB国際シンポジウムを開催

医学研究院医理工学グローバルセンターは、8月8日（土）に米国スタンフォード大学医学部放射線腫瘍学科と合同で「第13回GCB国際シンポジウム（The 13th GCB Biomedical Science and Engineering Symposium）」を開催しました。本シンポジウムは、現地会場とZoomウェビナーによるライブ配信を併用したハイブリッド形式で実施されました。

開会にあたり、同センター副センター長の橋本孝之教授と、スタンフォード大学医学部放射線腫瘍学科長のクイン・トゥ・レー教授から挨拶が述べられた後、「革新的な放射線治療の進歩」と「量子コンピューティング及びAI」の2大テーマのもと、2部構成で発表が行われました。午前のセッションでは、スタンフォード大学や本学医学

研究院・工学研究院・北海道大学病院の教員に加え、台湾長庚記念医院の臨床医が登壇し、立位陽子線治療や動体追跡技術などの最新照射技術や免疫細胞への線量評価を活用した新たな治療戦略など、最先端の知見と臨床応用の可能性を巡って活発なディスカッションが交わされました。午後のセッションでは、スタンフォード大学や本学情報科学研究院の教員のほか、米国IBM社、富士通株式会社の研究者・専門家が登壇し、急速に進展する量子コンピューティング技術の動向や創薬・ヘルスケア分野への展開可能性について講演が行われ、質疑応答では講演者と参加者との間で積極的な意見交換がなされました。閉会に際しては、同センター画像診断部門長の工藤興亮教授が登壇し、各セッションで紹介された研

究成果や議論の内容を振り返りながら本シンポジウムを総括するとともに、講演者及び参加者への謝意を述べてシンポジウムを締めくくりました。

当日は、海外からの参加者を中心に107名が参加し、研究者や医療従事者、企業関係者を中心に学生や本テーマに関心を寄せる多くの方々が一堂に会する貴重な交流の場となり、今後の国際共同研究や産学連携の発展につながる有意義な機会となりました。

本センターでは、今後も国際シンポジウムをはじめとする取り組みを通じて、異分野融合による世界トップレベルの研究推進とグローバル人材の育成を図り、国際的な研究・教育拠点としての発展に努めてまいります。

（医学研究院）



レー教授による開会の挨拶



講演する米国IBMのカレモア・ゴバル氏



質疑応答の様子



参加者による集合写真

医学研究院医理工学グローバルセンターが第13回GCB医学物理サマースクール及び第9回GCB分子生物医科学・診断学サマースクールを開催

医学研究院医理工学グローバルセンターは、8月3日（月）～7日（金）の5日間、米国スタンフォード大学医学部放射線腫瘍学科との共催により、第13回GCB医学物理サマースクール及び第9回GCB分子生物医科学・診断学サマースクールを開催しました。本プログラムは、医理工学院の科目として開講されており、Hokkaidoサマー・インスティテュート（HSI）の科目としても提供されています。

今年度は世界各国から100件に及ぶ応募が寄せられ、本サマースクールに対する国際的な関心の高さが示されました。現地開催の定員に伴い、応募者の多様性や専門性を考慮した厳正な選考を実施した結果、最終的に医学物理コース10名、分子生物医科学・診断学コース9名の計19名を受け入れました。大学・研究機関・医療機関など多岐に

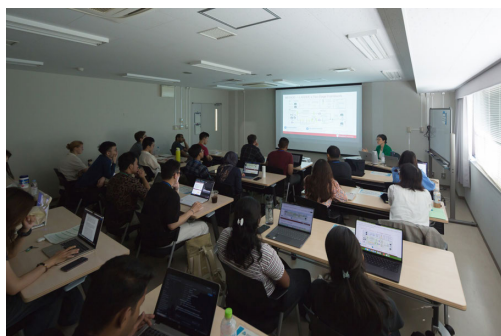
わたる所属から、バックグラウンドの異なる学生や若手研究者、医療従事者が一堂に会し、国際色豊かで活気あふれる学びの場となりました。

講義は全編英語のオムニバス形式で行われ、医理工学院及び同センターに参画する教員をはじめ、スタンフォード大学、米国IBM社、台湾長庚記念医院、量子科学技術研究開発機構（QST）、株式会社日立製作所など、国内外の第一線で活躍する専門家を講師陣に迎え、基礎から臨床応用まで包括的な学びが提供されました。また、本プログラムの大きな特色であり毎年高い人気を誇るハンズオン形式の実習や北海道大学病院陽子線治療センターでのファシリテツターが実施されたほか、最終日には参加者によるプレゼンテーションが行われ、参加者同士が互いに学びを深めました。

参加者アンケートでは、全体を通して極めて高い評価が得られ、「最新の研究や将来の研究の方向性について知識を広げることができた」「最前線の研究者の課題解決プロセスを学べた」「世界中の参加者とのネットワーク形成が非常に有意義だった」といった学術・交流面での成果に加え、円滑な運営体制に対しても好意的な意見が多く寄せられました。

本センターでは、今回の成果と寄せられた貴重なフィードバックを糧に、GCBサマースクールのさらなる充実を図るとともに、世界をリードする異分野融合研究の推進と国際連携教育の強化に努めてまいります。

（医学研究院）



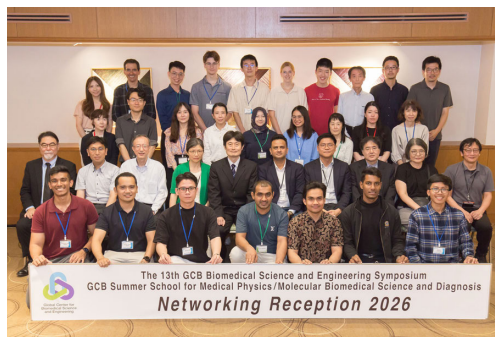
講義の様子



実習の様子



修了証を受け取る参加者



懇親会での集合写真

「がん研究に係る北大・UoMワークショップ」を開催

8月19日（水）・20日（木）に、医学研究院で「がん研究に係る北大・UoMワークショップ」が開催されました。本ワークショップは、戦略的国際パートナー校である豪州メルボルン大学の研究者11名と本学の研究者17名が集まり、腫瘍免疫学、再生医療、画像診断・AI、空間オミクス、光線力学療法から臨床応用まで、がん研究に幅広い切り口での取り組みを紹介するものです。両校共同出資のワークショップ・ファンド、そして医学研究院が採択されている「ひと・AI/DX・しくみの三位一体的整備による次世代AI活用・データ駆動・情報循環型医学研究の戦略的推進（PRISM-HU）」事業の共同企画として計画されました。

メルボルン大学からは、フレデリッ

ク・ホランド副医学院長、臨床病理学科のルー・フリール・チェア研究員、フエ・マイ・ラ研究員、博士学生のロビン・ワグナー氏、本学とのデュアルディグリー学生であるシーウェイ・タン氏が来札しました。5名の来訪者たちは、同学医学・歯学・保健科学研究院、工学IT研究院、理学研究院からのオンライン参加者とともに、田中伸哉医学研究院長をはじめ、北海道大学病院、遺伝子病制御研究所、総合イノベーション創発機構化学反応創成研究拠点（ICReDD）、先端生命科学研究院、薬学研究院、電子科学研究所の研究者たちと、2日間にわたり熱く議論を交わしました。

来訪者一行はワークショップ参加研究者との交流のほか、陽子線治療セン

ター、北海道大学病院バイオバンク、ICReDDの施設見学を行いました。また、今後も継続して連携を進めるにあたり、研究資金への申請や互いの若手研究者による研究滞在の計画が話し合われました。令和7年4月に田中研究院長がメルボルン大学及びピーター・マッカラムがんセンターを訪問したことを契機として始まった連携は、今年2月のPRISM-HUによる同学訪問、一般のワークショップと着実に深化しています。ワークショップの歓迎レセプションには寶金清博総長も参加し、両校の医学を中心とした異分野融合研究領域の拡大の可能性が示されました。

（医学研究院、国際連携推進本部）



ワークショップ風景



歓迎レセプションの様子



ホランド副医学院長



田中医学研究院長

薬学研究院で「第23回薬学研究院研究発表会」を開催

薬学研究院では、8月7日（金）に「第23回薬学研究院研究発表会」を開催しました。本発表会は、教員のプレゼンテーション能力向上及び、他分野の研究に関する理解を深めることによる共同研究の活性化を目的として、平成24年度に始まり、FD研修会を兼ねて年2回実施しています。また、本開催から新たに遺伝子病制御研究所の教員にも参加及び発表いただき、部局間の交流の機会となりました。

発表会は、市川 聡薬学研究院長に

よる開会挨拶の後、薬学研究院天然物化学研究室の吉村 彩助教による「休眠遺伝子由来天然物の探索とその応用」、薬学研究院衛生化学研究室の木村俊介教授による「特殊粘膜上皮M細胞からの物質取り込み機構とその生理病理的意義」、遺伝子病制御研究所分子細胞生物研究室の岡崎朋彦准教授による「ウイルス感染に対し生死を分けるメカニズム～カルボキシル化修飾と膜トポロジー反転～」の3件の研究発表が行われました。

本発表会には、教員52名が参加し、様々な分野の教員から発表者への質問が寄せられ、活発な討論が交わされました。教員の異分野への知見の拡大やプレゼンテーション能力の向上、共同研究の活性化につながる非常に良い機会となりました。次回は令和9年3月に開催予定です。

（薬学研究院・薬学部）



発表する吉村助教



発表する木村教授



発表する岡崎准教授



研究発表会の様子

薬学部で「第27回生涯教育特別講座夏季講演会」を開催

薬学部生涯教育特別講座は、薬学部同窓生を含む医療関係及び関連領域の仕事に従事される方を対象に、医療における諸問題について最新の情報を提供することを目的として実施されています。

8月10日（月）、薬学部にて夏季講演会が開催され、薬局や病院などの薬剤師の方々をはじめ、薬学部学生や同窓生、教職員等46名が参加しました。

今回は「免疫学とリウマチ膠原病治療の進歩」と題して、帝京大学医学部附属病院リウマチ・膠原病内科の河野 肇教授にご講演いただきました。ノーベル賞で注目を集めた制御性T細胞・末梢免疫寛容を切り口に、免疫学の歴史、治療アルゴリズムやサイトカイン研究、SLEにおけるB細胞標的療法のこれからの展望まで、分かりやすく丁寧に解説いただきました。会場か

らは多くの質問が寄せられ、活発な議論が行われました。参加者からは、「医学・生理学分野におけるノーベル賞とその背景や複数の疾患に関する知識を学ぶことができました」「免疫機構について歴史から深く振り返ることができ、とても面白かったです」など、多くの意見が寄せられました。

（薬学部）



講師の河野教授



会場の様子

農学研究院で150周年記念講演会を開催

8月1日（土）、農学研究院は、一般社団法人札幌農学同窓会とともに、農学部において、北海道大学創基150周年農学研究院企画記念講演会「札幌農学校から未来へー北海道大学150年と次世代農学の展望ー」を開催しました。本講演会では、社会で活躍している農学部卒業生から、産業・研究・行政の視点から持続可能な社会に向けた農学の将来像について講演いただきました。対面及びオンラインの同時開催として、延べ194名が参加しました。

講演者として、いであ株式会社理事の柵木 環氏、日本甜菜製糖株式会社代表取締役社長の石栗 秀氏、株式会社電通北海道メディアプロデュース局

メディアプランニング2部長の田中政孝氏、札幌農学同窓会理事長・北海道大学名誉教授・科学技術コミュニケーターの松井博和氏が登壇しました。

講演会は農学研究院の当真 要教授の司会のもと進行し、久保友彦農学研究院長から開会の挨拶及び本講演会の趣旨説明の後、4名による講演が行われました。第一講演では柵木氏から「未来を創る『土地改良』～農業の魅力と可能性を探る～」、第二講演では石栗氏から「北海道農業とてん菜産業」、第三講演では田中氏から「コミュニケーションで拓く、北海道農業の未来」、第四講演では松井氏から「農学の原点～これまでとこれから～」と題して講

演いただきました。

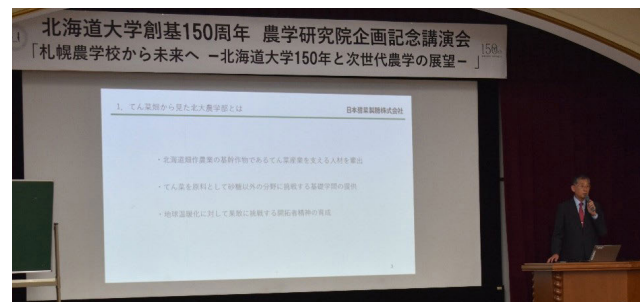
各講演では、講演者の経歴紹介に続いて、農学部・農学院での学び・経験と業務との関連性、農学部卒業生の社会での活躍、農業・農村が抱える課題解決の方向性などについて様々な視点からお話いただきました。

本講演会とあわせて、会場では一般社団法人札幌農学同窓会が所蔵する植物画や動物画など貴重な歴史的資料の特別展示、学科ごとに研究パネルや研究材料などの展示も行われ、参加者の関心が寄せられました。

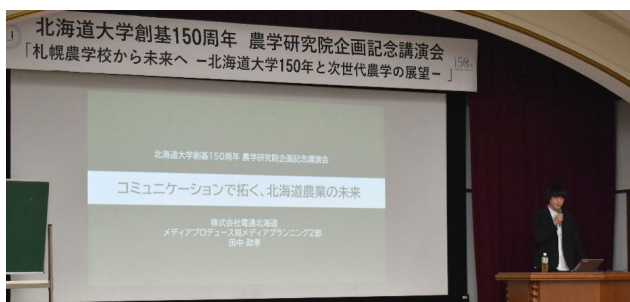
（農学院・農学研究院・農学部）



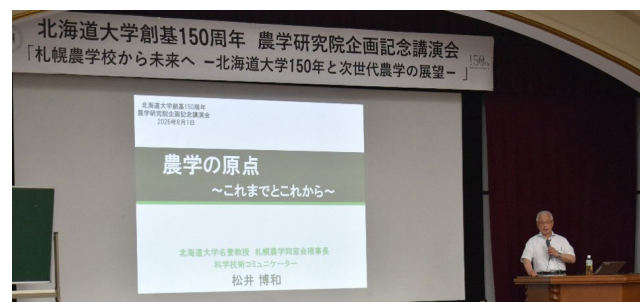
柵木氏による講演の様子



石栗氏による講演の様子



田中氏による講演の様子



松井氏による講演の様子

農学部・農学院とシンガポール国立大学間で「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」を開催

農学部・農学院ではシンガポール国立大学（以下「NUS」という。）との「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」を開催しました。本プログラムは2018年度から始まったもので、海外ラーニング・サテライト事業にも採択されています。このプログラムは、農業を地域で育まれた文化・産業と考え、異なる文化的背景の学生達がそれぞれの国の食料生産、加工や流通技術等の学びを通じて交流し、農業や食への理解を相互に深め、グローバル化時代における農業のあり方を考える内容となっています。

今年度は6月8日（月）～12日（金）は農学部・農学院が主催し、8月3日（月）～7日（金）はシンガポールに場所を移し、NUSが主催しました。今年度は農学部の学生が8名、NUS理学部の学生が15名参加しました。

6月の北海道大学主催のプログラムでは、北海道農業史の概論を受講後、実験用水田で田植え実習を行いました。自国に農業用水田がないNUS学生

には驚きの多い体験だったようです。余市果樹園では果樹管理の学習を行い、果樹作物の加工技術実習としてリンゴジャムを作りました。学生達は品種改良による食味改善を実感しつつ、自作ジャムの味を楽しみました。市場・流通学習として中央卸売市場を、そして家畜排せつ物再利用として鹿追町バイオガスプラントを見学しました。大きな再生エネルギーを生み出すバイオガスプラントは、シンガポールの将来へのヒントとなったようで、活発な質疑応答がみられました。

8月のシンガポールプログラムでは、環境制御された効率的な葉物野菜生産システムを視察しました。国内での新鮮なサラダ生産は国民の健康維持にも貢献し、それを試食でも体験できました。循環型経済としての食料流通システムとして、食料廃棄物を利用した昆虫飼育システムを学内外で見学しました。また、陸路で国境を越えて、隣国マレーシアの商用熱帯果樹園を見学しました。国境という見えない境界線を

挟みつつも、隣国との平和な人的・経済的交流を目の当たりにして、グローバルな食料安全保障について、実感とともに新たな視点が得られました。

講義や見学後にはNUSの学生らと活発に議論し、食事をともにしながら交流を深める姿に札幌プログラムからつながる絆をみることができました。今年度は、シンガポールの北海道大学同窓会である「シンガポール・エルム会」とも交流会を持つことができました。エルム会からは広報アンバサダー（HURPA）の安田 哲客員教授、トルステン・ヴォーランド教授をはじめとして、現地でご活躍の方々が参加され、NUSからも本プログラム責任者のチュー・フックティム教授が参加しました。開催年数が重なるにつれ、実効性のある大学間学生交流へと発展する場が開拓されるとともに、本プログラムの目的が着実に学生へ伝わっている手応えを感じました。

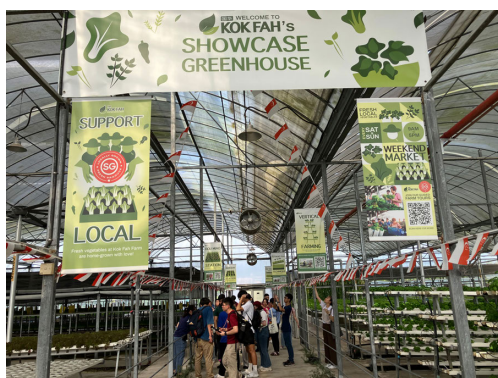
（農学院・農学部）



北大プログラムでの記念撮影（北大余市果樹園にて）



北大プログラムでのリンゴジャム作り実習



NUSプログラムでのKok Fah Farm見学ツアー

第47回あぐり大学「世界に一つだけの地図をつくってみよう」を開催

8月22日（土）に、農学部においてあぐり大学を開催しました。

あぐり大学は、北海道大学農学部と北海道新聞編集局が平成26年度から一緒に行っている連続親子講座で、「食と農」について、頭と体を使って学ぶ体験型講座です（農学同窓会後援）。農学部の複数の学科から学生もスタッフとして参加しています。

第47回となる今回は、「世界に一つだけの地図をつくってみよう」のタイトルで、山本忠男准教授（農業土木学）があぐり博士を担当しました。

カーナビやスマートフォン、学校の地図帳など、地図は私たちの身近なところで使われています。農業でも、トラクターが自動で走るときなど、地図は大切な役割を果たしています。今回は、地図をどのようにつくっているのか、基本的な地図の作り方について学ぶとともに、土地の位置を正しく測る「測量」を通して地図の作成を体験しました。

最初に、「地図の作り方」について、あぐり博士がクイズを交えながら分かりやすく解説しました。参加者た

ちは、伊能忠敬がどのような努力や工夫をして地図をつくったのかを学びました。その後、参加者たちは実際に「測る」「記録する」といった作業に取り組み、自分たちの手で地図を作成しました。

参加した子どもたちは協力しながら地図づくりに取り組んでいました。今回のあぐり大学は参加者たちが地図をより身近に感じる機会となりました。

（農学部）



あぐり博士（山本准教授）の説明を聞く親子



「測量」により地図の作成を体験する子どもたち

函館キャンパスの学生・教職員が函館港まつりに参加—創基150周年をPR—

8月2日（日）、函館市で開催された函館港まつりのパレード「ワッショイはこだて」に、水産学部の学生・教職員約220人が参加しました。約1.4kmの十字街・松風コースを「いか踊り」で練り歩き、水産科学研究院の藤森康澄

研究院長と細川雅史副研究院長も参加するなか、学生が中心となって函館港まつりを盛り上げました。函館キャンパスでは今後も、道南地域の皆様とともに、創基150周年を盛り上げてまいります。

なお、本取組は、水産学部ウェブサイトにも掲載しておりますので、是非ご覧ください。

<https://www2.fish.hokudai.ac.jp/other/29697/>

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



集合写真



創基150周年ロゴマークを掲げる学生・教職員



水産学部の法被姿で出番を待つ学生たち



いか踊りの様子

函館市電（市営交通）に創基150周年記念広告を掲出

8月1日（土）～9月30日（水）の期間、函館市が運営する函館市電の車内に、北海道大学創基150周年広告を掲出しています。この広告は、道南地域の皆様をはじめ、函館を訪れる観光客の方々に向けて、北海道大学が創基150周年という節目の年を迎えること

を広く発信するものです。北大と関わりの深い地域の皆様に創基150周年を身近に感じていただくとともに、多くの方々に北大の歩みや函館キャンパスにおける教育・研究活動について知っていただく機会となることを期待しています。期間中、函館市電の計6両に

中吊り広告を掲出しています。ご乗車の際には、ぜひご覧ください。

なお、本取組の詳細は、水産学部ウェブサイトにも掲載しております。

<https://www2.fish.hokudai.ac.jp/other/29697/>

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



函館市電（中吊り広告）

令和8年度水産学部公開講座「海をまるごとサイエンス！」が終了

水産学部では6月20日（土）～7月25日（土）に、公開講座「海をまるごとサイエンス！」（全4回）を開講しました。

本講座は今年で40回目の開催となり、令和6年10月に函館キャンパス内にオープンした水産科学未来人材育成館を会場として、対面及びオンラインで同時開催し、延べ302名の方に受講いただきました。

本講座では、水産学部教員が日々取り組んでいる研究を一般の方々に紹介し、水産科学の理解を深めることを目的としており、今年度は「変わる海と命・食、そして生き物の不思議」をテーマに全4回の講演を行いました。

参加者は、馴染みのある海の変化に関する各講演に興味深く傾聴するとともに、各回の講演後に設けた質疑応答では多くの質問をいただき、関心

の高さがうかがえました。海の変化や生き物の不思議、食の安全について理解を深める貴重な機会となりました。

今後も、水産学部では、様々な形で水産科学の普及活動を展開していきます。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

各回の講演題目と講師

- | | |
|-----|---|
| 第1回 | 「北極の変化は私たちに何を語るのかー海水減少と海洋観測の最前線」
水産科学研究院 特任助教 孫 恩愛 |
| 第2回 | 「魚の研究から探る生殖細胞の不思議と水産への応用」
水産科学研究院 准教授 西村俊哉 |
| 第3回 | 「水産食品に潜む微生物と食中毒」
水産科学研究院 助教 山木将悟 |
| 第4回 | 「空想？現実！：海岸動物の行動と生態」
水産科学研究院 教授 和田 哲 |



藤森康澄水産学部長による開講の挨拶



講演の様子

総合博物館でノーベル賞展示室をリニューアルオープン

8月6日（木）に総合博物館で創基150周年記念展示「“Lofty Ambition”（高邁なる大志）の系譜」がオープンしました。本展示は鈴木 章名誉教授のノーベル化学賞受賞記念展示室をリニューアルしたものです。2021年にノーベル化学賞を受賞されたベンジャミン・リスト特任教授から2024年に本学にノーベル賞メダル公式レプリカを寄贈いただいたことを機に、工学研究院、総合イノベーション創発機構化学反応創成研究拠点（以下「ICReDD」という。）、総合博物館の教職員が協働して展示を製作しました。これまでの鈴木名誉教授のご研究やその歩みを紹

介する展示に加え、リスト特任教授のノーベル化学賞受賞研究である不斉有機触媒についての解説パネルや関連する試薬や論文、そしてリスト特任教授がICReDDでご使用の机と同じ型のものなどを展示しています。さらに、両先生のノーベル賞メダル公式レプリカを展示する、道産木材を活用し「有機化学の世界観」を表現した展示棚を新設しました。

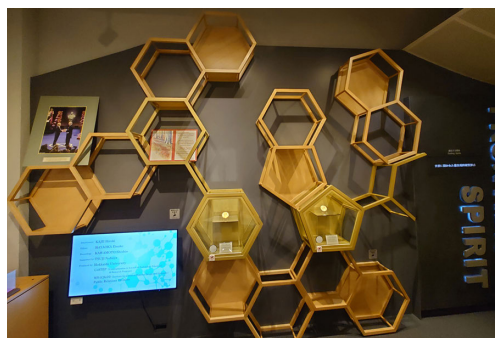
オープニングセレモニーでは、まず、寶金清博総長から挨拶があり、150年前、札幌農学校開校時のクラーク博士の言葉から始まったフロンティア精神が、リスト特任教授のノーベル化学

賞受賞にも通じており、鈴木名誉教授、リスト特任教授に次ぐノーベル賞受賞者が必ず現れることを確信している旨が述べられました。続いて、総合博物館の山内太郎館長から、展示リニューアルの経緯や展示内容の紹介がありました。最後に、AIによる同時翻訳の下、リスト特任教授から挨拶があり、「化学」という魔法に魅了されて化学者となった経緯や、触媒研究を支えた仲間・同志たちへの感謝が述べられました。

（総合博物館）



リスト特任教授によるご挨拶の様子



ノーベル賞メダル公式レプリカを展示している新設展示棚

附属図書館で創基150周年記念「北海道大学附属図書館の歴史」展を開催中

附属図書館本館では9月14日（月）から、創基150周年記念「北海道大学附属図書館の歴史」展として、パネル展示を正面玄関ロビーにて、図書展示をSky Open Areaにて、それぞれ開催しています。

本展示では本学の創基150周年を記念し、その150年の歩みの中で常に大学と共にあった図書館の歴史を様々なエピソードから紐解きます。

パネル展示では開校当初の「書籍室」から現在に至る建物の変遷、新渡戸稲造や神西 清といった図書館に関わった人々、近年のデジタルコレクションの整備などを豊富な写真によって紹介しています。また、国の重要文化財であるヤエンコロアイヌ文書のレプリカも展示しています。

図書展示では本学と図書館の歴史に関する本に加え、図書館長や図書館職

員等、関係者の著書を展示しています。閲覧や貸出も可能ですので、気になる本がありましたら実際に手に取って読んでみてください。

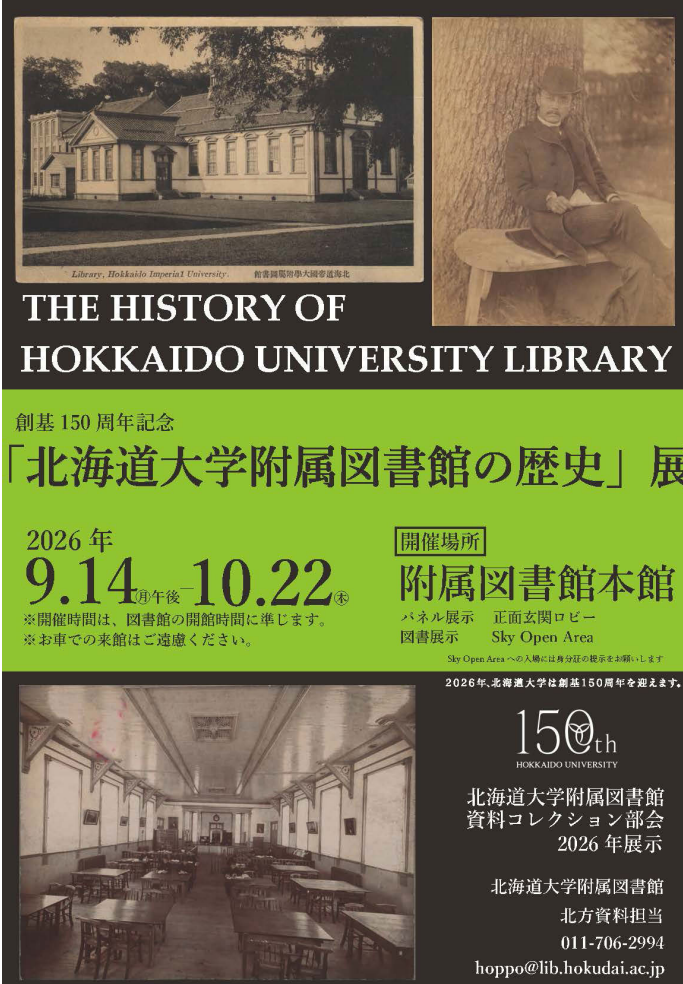
開催期間は10月22日（木）までです。この機会に150年の歴史をぜひご覧ください。

（附属図書館）

附属図書館本館開館時間（10月）

平日 : 8:00～22:00

土日祝日 : 9:00～19:00



**THE HISTORY OF
HOKKAIDO UNIVERSITY LIBRARY**

創基 150 周年記念
「北海道大学附属図書館の歴史」展

2026 年
9.14 月午後 **10.22** 日
※開催時間は、図書館の開館時間に準じます。
※お車での来館はご遠慮ください。

開催場所
附属図書館本館
パネル展示 正面玄関ロビー
図書展示 Sky Open Area
Sky Open Area への入場には身分証の提示をお願いします。

2026 年、北海道大学は創基150周年を迎えます。

150th
HOKKAIDO UNIVERSITY

北海道大学附属図書館
資料コレクション部会
2026 年展示

北海道大学附属図書館
北方資料担当
011-706-2994
hoppo@lib.hokudai.ac.jp

ポスター

連続トークイベント「知のトビラをたたく」@北大図書館 第1回 「水の中に棲むホネのない生き物たちのトビラ」を開催

附属図書館では、7月9日（木）に、連続トークイベント「知のトビラをたたく」@北大図書館 第1回「水の中に棲むホネのない生き物たちのトビラ」を開催しました。本イベントは、図書館を「新しい知と出会える場」としてより身近に感じてもらうことを目的に企画したもので、学内の研究者を講師として迎え、研究の魅力や最新の研究成果について講演いただくことで、北大生の知的好奇心を喚起し、学内における知の循環と創出を促進することを目指しています。

第1回となる今回は、系統分類学や生物学を専門とする理学研究院生物科学部門多様性生物学分野Ia研究室の角井敬知講師と、同研究室博士後期課程1年の関口翔悟氏に講演いただきました。角井講師からは、研究室の概要や研究者を志した経緯に加え、千島海溝において自由生活性（寄生しない）扁

形動物としては世界最深記録となる生物を発見した研究成果などが紹介されました。また、「新しい発見はそこにある」というメッセージのもと、身近な場所にも未知の生物や新たな発見の可能性が存在することが語られました。関口氏からは、深海から採集されたウミグモ類の研究について紹介があり、日本初記録となる深海性ウミグモの発見や、新たな和名の提唱、さらにはウミグモに付着する生物に関する世界初の記録など、興味深い研究成果が示されました。

当日は23名が参加し、参加者は終始熱心に講演に聞き入っていました。質疑応答では、講師と参加者との間で活発な意見交換が行われ、本テーマへの高い関心がうかがえました。

また、関連企画として6月24日（水）～7月15日（水）の期間、図書展示及び写真パネル展示を開催しました。図書

展示は、本館2階Sky Open Area及び北大図書館東棟2階展示コーナーにおいて実施し、イベントテーマである系統分類学や生物学に関する図書を展示しました。展示資料は、角井講師推薦図書を含む約20冊で、来館者に関連分野への理解を深める機会を提供しました。写真パネル展示は、本館玄関ロビーにおいて実施しました。展示では、角井講師から提供されたタナイス類などの水生生物の写真をはじめ、野外調査や研究室での活動の様子、HUSCAPで公開されている角井講師の学術論文を紹介するパネルを展示しました。なお、写真パネル展示に関する来場者アンケートには155名から回答が寄せられ、本展示が多くの来館者の関心を集めたことがうかがえました。

（附属図書館）



講演する角井講師



講演する関口氏



会場の様子



図書展示（本館）

こども本の森×北海道大学 学びのプログラム 「今日からきみも考古学者！」を開催

8月17日（月）、北海道大学とこども本の森 札幌・北大との連携による学びのプログラム「今日からきみも考古学者！」を開催しました。学びのプログラムは、北海道大学の知的資源を子どもたちにひらき、知的好奇心を育むことを目的とした取組です。

今回は埋蔵文化財調査センターの協力のもと、レクチャートークと発掘現場見学会の二部構成で実施しました。

レクチャートークでは、同センター長の高瀬克範教授を講師に迎え、札幌キャンパスの多くが遺跡の上に広がっていることや、こども本の森 札幌・

北大の地下にも先史時代の住居跡が存在することなどについて分かりやすく解説していただきました。また、遺跡発掘の方法や昔の人々の暮らしについて学ぶとともに、縄文土器の破片に実際に触れる貴重な体験も行いました。さらに、「過去を学ぶことが未来につながる」というお話を通じて、参加者が考古学の意義について理解を深める機会となりました。

続いて実施した発掘現場見学会では、札幌キャンパス内の新施設建設に伴う発掘調査現場を訪れ、同センター研究員の守屋豊人助教及び許 開軒助

教から、発掘調査の進め方や発見された遺構について解説を受けながら見学しました。参加者は発掘現場に足を踏み入れ、実際の地層や炉跡を間近に観察しました。また見学会では、札幌キャンパスで出土した土器や石器を実際に手に取って観察する機会も設けられました。子どもたちは興味深そうに質問を重ねながら考古学への関心を深め、普段はなかなか体験できない学びの時間を過ごしました。

（附属図書館）



レクチャートークの様子



発掘現場見学会で炉跡の解説を受ける子どもたち

北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション北管理部が「森林（もり）の市」に出展

旭川地方木材協会などが主催する「森林（もり）の市」が7月26日（日）に旭川市で開催され、北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション北管理部が出展しました。

本イベントは今年で39回の開催を迎える地元の恒例行事で、のこぎりで丸太を切る競争や家具作りなど様々な体験を通じて実際に木に触れ、来場者に木の魅力を感じてもらう催しです。当日は天候にも恵まれ、大勢の市民や観光客、親子連れで賑わいました。

北管理部は昨年に引き続き2回目の出展です。販売コーナーでは、研究林から切り出した木材でカッティングボードやウイスキーホルダー、PCモニタースタンドを製作し、展示販売しました。木工ハンドメイドのコーナーでは、参加者にカッティングボードやボールペン作りを体験していただきました。トドマツの苗木で鉢植えを作るブースや斧を使った薪割り体験コーナーは、行列ができるほど多くの参加者が集まり、賑わいを見せました。

一般参加の丸太切り競争には、北管理部の職員が「北海道大研究林」チームとして出場し、その健闘ぶりに観客からは大きな声援が送られました。

今後も北管理部では、市民の方々に森林の魅力や重要性を身近に感じてもらえる取り組みを積極的に行っていきます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



展示販売した木工品



薪割りコーナー

北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション北管理部が「北大研究林サイエンスツアー」を開催

北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション北管理部は8月5日（水）に「北大研究林サイエンスツアー」を開催しました。

本イベントは美深町の団体からご寄附いただいた「北の森林（もり）プロジェクト（フロンティア基金）」の返礼品として企画・開催したものです。

ツアーには美深町第一自治会子ども会の小学生ら15名が参加し、北管理部の所有する森の中で立木を伐採したり、薪を割ったり、焚き火をおこすなどの体験活動を楽しみました。

立木の伐採では、子どもたちが職員の指導を受けながらノコギリを使って木の幹を切りました。ノコギリの刃を入れた後はみんなでロープを引っ張って倒します。木が地面に倒れた瞬間、子どもたちからワッと歓声が上がりました。薪割り体験では、職員から斧とハンマーの使い方や安全な姿勢について説明を受けた後、子どもたちが実際に挑戦しました。斧を振り下ろし、薪が勢いよく割れるたびに周りから拍手が起きました。昼食時にはおにぎりを食べ、子どもたちが自分でおこした焚

き火でソーセージやマシュマロを焼いて楽しみました。そのほかにも生息動物の痕跡を探す散策や鉢植えのジオラマ作りなどを実施し、参加した子どもたちは夏の思い出となるひとときを過ごしました。

北管理部ではこれからも「北の森林（もり）プロジェクト」の充実を図るとともに、研究林の魅力や研究成果をわかりやすく発信するアウトリーチ活動に努めてまいります。

（北方生物圏フィールド科学センター）



ノコギリで木を切る体験



斧やハンマーを使った薪割り体験

■ 理事退任にあたって

本年9月30日限りで理事・副学長を退任される方のお言葉と略歴を紹介します。

理事・副学長・事務局長

よこい まさお
横井 理夫 氏



このたび、文部科学省の人事異動に伴い、北海道大学を離れることとなりました。

半年という期間ではありましたが、総長をはじめ教職員の皆様方に温かく迎えていただき、事務統括、リスク管理統括、社会連携統括担当の理事・副学長・事務局長として、様々な案件に取り組む機会をいただいたことに、心より感謝申し上げます。

現在、HU VISION2030の実現に向け、全学で改革と挑戦を進めているところであり、自分もその一員として、微力ながら力を尽くし、更なる発展に貢献したいと考えておりました。その中で、今回の人事異動により志半ばで辞することは、誠に残念でなりません。

この間、北海道大学の持つ大きな可能性と、皆様方のHU VISION2030実現に向けての熱意に触れることができたことは、私にとってかけがえのない財産です。北海道大学の更なる発展を心からお祈りいたします。

皆様方から賜りました御厚情に深く感謝申し上げ、退任の御挨拶といたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和47年2月24日
平成 6年 3月	同志社大学経済学部卒業
平成 6年 4月	文部科学省助成局教職員課
平成16年 4月	石川県企画開発部企画課高等教育振興室長
平成17年 4月	石川県企画振興部地域振興課高等教育振興室長
平成18年 4月	文部科学省官房国際課専門官
平成18年 9月	在中華人民共和国大使館一等書記官
平成22年 4月	文部科学省初中局特別支援教育課特別支援教育企画官
平成25年 7月	文部科学省科政局産業連携・地域支援課大学技術移転推進室長
平成26年 9月	在中華人民共和国大使館一等参事官
平成30年 4月	内閣府政策統括官(科学技術・イノベーション担当) 付参事官 (イノベーション創出環境担当)
令和元年 7月	文部科学省科政局企画評価課長
令和 2年10月	文部科学省総合局地域学習推進課長
令和 3年 7月	独立行政法人国立青少年教育振興機構理事
令和 6年 4月	文化庁政策課長
令和 8年 4月	北海道大学理事・副学長・事務局長

■表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
8.8.24	駐日オーストラリア大使館 Andrew Shearer 特命全権大使他2名	今後の交流に関する懇談



Andrew Shearer 駐日オーストラリア大使（左から5人目）

（国際部国際連携課）

人事

令和8年9月1日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【教授】 大学院保健科学研究院教授 大学院獣医学研究院教授	福 永 久 典 中 山 翔 太	大学院保健科学研究院准教授 大学院獣医学研究院准教授

新任教授紹介

令和8年9月1日付



保健科学研究院教授に

ふくなが ひさのり
福永 久典 氏

医用生体理工学分野
放射線技術科学専攻
放射線生物学研究室

最終学歴

英国クイーンズ大学ベルファスト大学院博士課程修了（令和元年11月）
Ph.D.（クイーンズ大学ベルファスト）

専門分野

環境・産業衛生学、放射線生物学、保健物理学



獣医学研究院教授に

なかやま しょうた
中山 翔太 氏

環境獣医科学分野毒性学教室

生年月日

昭和58年2月19日

最終学歴

北海道大学大学院獣医学研究科獣医学専攻博士課程修了（平成24年3月）
博士（獣医学）（北海道大学）

専門分野

毒性学

編集メモ

- 広報誌『北海道大学統合報告書2026』を発行しました。
統合報告書は、本学の現状や中長期にわたる価値創造に向けた取り組みをお伝えすることを目指しています。
2026年度版では、創基150周年を迎える本学が未来に向けて展開する記念事業や研究分野について紹介しています。
<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/integrated/>
- 広報誌『リテラポブリ』Vol.77を発行しました。今回は、「照らす」をテーマに、創基150周年記念事業の中から「こども本の森 札幌・北大」「古河講堂の改修・利活用」の二つの取り組みを紹介しています。ぜひご覧ください。
<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/litterae.html>





キャンパス懐古 18 ポプラ並木を背景に立ち並ぶ農場の「藁ぼっち」（1980年代）

稲刈り後の田んぼには、脱穀した後の稲藁を積んで干している風景が見られます。三角に積み上げた稲藁の山を「藁ぼっち」と呼ぶ地方もあり、農村では秋の風物詩になっています。乾燥した稲藁は肥料や飼料や縄などになるほか、かつては敷き物・履き物・被り物・上着などの材料ともなり、農家の貴重な農産資源でした。札幌キャンパス内の農場でも、農村と同じ

「藁ぼっち」が立ち並ぶ風景を見ることができます。

札幌キャンパス内の農場は、札幌農学校開校の1876年秋、教頭W.S.クラークの強い要望により設置された農校園を前身とします。北海道大学創基150周年の今秋、農場も150周年を迎えました。

（大学文書館・北海道大学150年史編集室）